**間章　７・５章**

**瀬名紫陽花のメイクパワーアップ大作戦**

「これじゃ、だめだぁ……」

ここは紫陽花さんのおうち。そしてわたしの目の前で、紫陽花さんは打ちひしがれていた。

あ、紫陽花さん……!?

「私じゃ、れなちゃんのポテンシャルを100パーセント引き出すことは、できないよ……」

**「そんなことないよ!?」**

そう、そもそもが無理な話だったのだ。

わたしが同窓会に出るからと言って、クインテットに協力を求めたのがつい先日のこと。真唯からは衣装を、紗月さんに恋人役を頼み、香穂ちゃんには催眠音声をお願いした。

そして、紫陽花さんはというと、わたしのメイク担当……だったのだが。

「そもそも0にはなにを掛けても0なわけで……。紫陽花さんの負担が大きすぎたんだよ……。素材がしょうもないのに、メイクだけでどうにかしてもらうなんて、ムリに決まってるよね……（※ムリだった！）」

「そんなことないよ!!」

うわあ！紫陽花さんのこんな大声、久しぶりに聞いた。『もー！』以来だ。

「れなちゃんのポテンシャルは、もう、すごい……すごいんだよ！ひゃくおくぐらいあるよ！だから、だめだめなのは、私の実力なんだよ……！」

はわわわ……。

紫陽花さんが頭を抱えてしまった。

どうしよう、紫陽花さんが落ち込んでしまっている。わたしにできることは、なにか……なにかないのか……？

「そ、そうだ！紫陽花さん、今度チーズケーキのおいしい店にいこうよ！こないだタイムラインに流れてきたんだ！ね、ね？」

「…………」

落ち込んだ紫陽花さんは、無反応だった。

無反応!?

そんな……。どんなヘロヘロの状況になっても、ひとまず話に乗ってくれるはずの紫陽花さんが、無反応だなんて……。わたしは紫陽花さんをそこまでおちこませてしまった……。あうあうあうあう。

わ、わたしは、どうすれば……。

「……よし」

ただひたすらうろたえていると、紫陽花さんが静かに顔をあげた。

その目には、まっすぐな輝き。

「……修行……」

「えっ!?」

なにやら、紫陽花さんの発声しそうにない空気の震えが伝わってきたんだけど。

紫陽花さんはぎゅっと拳を握って、改めて言い直した。

「修行するよ、私。れなちゃんを、世界一の美少女にメイクアップするために……！」

お、おお……。

その意気込みは嬉しいけど、ムリだよ紫陽花さん……！　魔法使いにでもなるしかないよ！

その日から、紫陽花さんの修行が始まった。

紫陽花さんは学校にメイク道具を持ってきて（しかもかなりたくさん）放課後ごとに、わたしの顔面にメイクを施した。

家では毎日、プロのメイクアップアーティストの動画を見て研究しているらしい。

「なにが紫陽花さんをそこまで突き動かすの……？」

ある日、そう聞いてみたことがあった。

すると紫陽花さんは、真剣な顔で。

「……私、れなちゃんの顔が好きだから」

「えっ……」

それはなかなか驚きの言葉だった。

ふたりだけ残った、夕焼けの照らす教室。紫陽花さんはハッと気が付いたように頬赤く染めて。

「あ、ええと。れなちゃんの顔、も、好き。顔好き、なの。それでね」

「は、はい」

「私はぜんぜん、今のままでも、れなちゃんのことすっごくかわいいと思うんだけど……でもね、れなちゃんが私を頼ってくれたのも嬉しくて、だから、私だけじゃなくて、世界中の人が、れなちゃんのこともっともっとかわいいって思ってほしくて……」

なんだか……勢いで、ものすごいことを言われている気がする……。

もじもじする紫陽花さんに、聞き返す。

「そもそもわたし、紫陽花さんにかわいいって思われていたの……？」

「えっ？いつも言ってるよね!?　かわいい、って……」

わたしは有名なネットミームを思い出していた。『かわいいにも二種類！わたしが言われていたのは恐らく……後者！』

しかし、マスコットとしてのかわいさではなかったようだ。

紫陽花さんはしっかりわたしを、女の子としてかわいいと認識している……！？

この、世界でいちばんかわいい紫陽花さんが！？

わたしは浄化されたような笑みを浮かべた。

「……ありがとう、紫陽花さん」

「う、うん？」

「紫陽花さんの今の言葉で、わたしは救われたよ」

「そ、そおなの？」

「たとえ世界中が敵に回ったとしても、紫陽花さんひとりがわたしのことをかわいいと思ってくれたら……わたしのこれまでは、無駄じゃなかったんだ。ありがとう、紫陽花さん」

「あれ！？世界中の人に好きになってもらえるようにって話を今してたんだけど！？」

「いいんだ。そんな夢物語は……。わたしは、もうじゅうぶん報われたから……」

「れなちゃん！？れなちゃーん！」

紫陽花さんに肩をがくがくと揺さぶられる。

ふふふ。嬉しいな。自己肯定感が満ちたりてゆく……。

紫陽花さんのその発言はたぶんひいき目で、例えるなら自分の飼っている猫がどうんなにブサイクでも世界でいちばんかわいく見える現象なんだろうけど……でも、だとしても、嬉しんだ。こんなに嬉しいとは、わたしの人生にはもうないかもしれない。

「と、とにかく！私はやれるだけのことはやるからね！？れなちゃん！」

「ふふふ。おっけー☆」

わたしは朗らかに笑った。もしかしたら、毎晩聞いている香穂ちゃんからの催眠音声の効果が出始めているかもしれなかった。

こうして、紫陽花さんの放課後の修行は、しばらく続いた。

だが、紫陽花さんがわたしのポテンシャルを百億引き出すことはなく……。同窓会が間近に迫ってしまったからというタイムリミットでおしまいがやってきた。

紫陽花さんは悔しそうにしていたので、近々またりベンジの機会が訪れる、かもしれない。

今まであんまり見たことがなかった紫陽花さんのこだわりと、頑固な部分を存分に味わえた日々であった。（恥ずかしかったけど！）